

一九九五年 二月 にしき江入会 短歌をこれより始める

臘梅

冬枯れのアルハンブラの城壁に臘梅独り虜囚の如くに
店頭に臘梅ありてふと寄ればその香にこみあく旅の思い出
臘梅の一輪手折り頬寄せし異国のガイドの翳り思ほゆ
臘梅のまるき蕾ら俯きて語らふごとし重き冬空

紅梅

紅梅の招く窓辺に頬つきて去にし日思ふ異郷の午後を
紅梅の紅濃き一輪姑の若き日かくやと独り思へり
紅梅の枝々に光る雨露は珊瑚の如き蕾宿せり
花蕊を一杯に開きし紅梅の造花の如き花の確かさ
紅梅の花びらは雛の唇よ手水の面にゆるく回れり

椿

裏庭に気儘に伸びし紅椿人に媚ぶるなく咲きて落ちゆく
ひよどりよな啄みそ紅椿爛漫の赤であらまほしきに
大輪の斑入りの椿重ね咲きそよ風に揺るる枝を撓めて
手折らばや白き斑入りの紅椿その大輪の我を誘ふに
芽吹き初むる草々の上に撩乱と桜貝散る八重椿散る

樹

苔むせる老木の腰低くして紅く芽吹ける枝差し延ぶる

苗

売出しのチラシに誘はれ購へるマーガレットの苗のか細き
植えたるは白菊黄菊紅の菊秋の彼岸の待たれぬるかな
帰去来と小菊の苗を垣に植う夫の故郷の初めての春

草

茅草の根のしたたかさ掘り起こし砂払ひ捨つ草の無念も

鳥

夕茜背に群れなせる戻り鳥大河となりて頭上を流る
夕日浴び大空高く行く鴉鳴き交わす声も遠く遙に
ばさばさと傘畳む音して鴉らは降るが如くに木々に止まれり

夜

手すさびにトランプ並べぬ狂ほしく夫待ちし夜を遠く思ひつ我独り
夫の故郷に夫を待つ充足感もある春の夜
猫抱きてラフマニノフを聞きながら眠らむとする充足の夜
疾駆する車のしづきあぐる音寄せては去れる孤独の目覚めに

道

面上げて一步踏み出し歩み来し我は未踏の道を惧れじ
如何ほどのことやあらんと晶子読みて脱帽と思ふ心愉しも
時計覗きつつバス停に走りたる去年までの朝を遠く遠く思ふ

山

山巔に立てば西海輝きて鎮魂の祈りしばし捧げぬ

機上より

綿雲の下はパステル色の海アメンボの如き船浮かぶ見ゆ

雪化粧せる普賢岳寄り来たる早春の朝の機上の窓辺

草笛

猫じゃらし穂を抜き吹けば細き音幻のごと幼き日と呼ぶ

猫じゃらし眼を閉じ吹きぬ弟と野原に遊びし幼き日はや

猫じゃらし吹けばかほそき音高く幻のごと遠き日浮かぶ

小諸なる懐古園にてしみじみと佐久の草笛聞きし日もあり

開聞岳紀行

未だ見ぬ開聞岳にあくがれて一人列車に乗れる春の日

春の海彫銀の如くきらめきて己がじし生くる悦び讃ふ

時は春快晴のあした開聞よ麗しき日に会ひにけるかな

たおやかに春の開聞砂を噛む海の裳裾を引き摺りて立つ

蓼科を女の神と左千夫詠ひける開聞汝こそ南国の乙女

彫銀のきらめき眩し春の海なべての絆しばし忘れぬ

彫銀の燦めき眩し春の海なべての想ひ溶かし沈めて

空

晴れ渡る残照の空一筋の飛行機雲の遠く伸びゆく
暮れなづむ空上弦の月白く一文字の雲細く伸びゆく
ゆるゆると石竹色の雲流れ柿の梢の芽吹き初む見ゆ

春

春愁は青春とともに去にけるやいまは芽吹き直にうれしも
ほんのりと一斤染の石楠花の夢の中より匂い出たる

雪の下

岩かげの雪の下の花楚々として伏目がちなる亡母の面影
雪の下の花のいく筋かそけくもそよげる夕べひとり佇む
雪の下の花のそよげる幽寂のひとときありて我が生を謝す

緑の茶会

春雨に若葉際立つ陶苑に揆音高き薩摩琵琶聞く
濡れそぼる若緑を行くお茶会の和服姿の群れの華やぎ
型通りの型をおかしみかしこまりてお茶を戴く我もおかしも

妹

妹の声は受話器に訥々と老衰進める父の様告ぐ
巨躯の父一人看取れる妹の疲れ思ひて胸塞ぐ夜
リュウマチの姑は今我と在り故郷の父よ無事にて在りてよ

昼下がり

郵便の来ぬ日侘しも二度三度ポスト覗きぬただ徒に
思いがけぬ友より重き箱届くバルザック全集二十巻あり
バルザック全集二十巻賜はりし友情胸衝きしばし黙せり

猫

病む猫の背は細くして蹠跟と竹の枯れ葉の吹き溜りを行く
牡猫の性の哀しき縄張りを争ひて受く眉間の深手よ

梅雨

梅雨空に薄紅刷くか合歡咲きて我が三度目の転機愉しむ
らつきょうの最後の端を切り落とし眼鏡外せり梅雨寒の午後

歴史

背の君の帰り間近し整へる本棚は語る二人の歴史を
夫の地に夫待ちあしこの一年長しとも思ふ短しとも思ふ
刻を惜しみ刻に追はれて来し我に天与なるかな無聊の一年

胡瓜

花陰にほどよきさまの胡瓜あり何時の間にかく育ちいたるや
我が植えし苗に成りたる胡瓜探るざらつく肌の感触うれしも

雑草

つゆ草どくだみかたばみと雑草の花の可憐さ雑草もよし
雑草の一つ一つを確かめて抜く我があとは抜きこぼしばかり
完璧に草抜き取れる庭の主を酷薄と思ふ手前勝手に

姑

幾十度同じ答へを姑に微笑みてする姑なれば

姑の水道栓のチ口チ口を黙して締める日に三度ほど

留守の間に食器洗へる姑の善意謝しつつ洗ひ直す我

らつきようは漬けしと告げしに姑のまた購へるを黙し受け取る

庭にて

ふと耳に般若の喘ぎ藪椿に絡まり締むる蔓絶ち手繰れば

きりきりと枝曲がるまで締めつける桂に覚ゆ我の女性を

鎌先に朝露散ればはたと飛ぶ精霊バツタの淡き翡翠よ

竹林の檜扇水仙に陽の射してからす揚羽の音もなく舞ふ

かなむぐら引けばぞろりと他愛なく軍手に纏ふ露しげくして

娘の事故

早鐘を打つ我が胸をプロペラの振動揺する娘よ待ちて居よ

眉ひそめ臉黒みし面おほふ酸素マスクの娘は助かりしと

ひと匙の粥のど通るも痛しとふ娘の胸骨は三つに折れいて

シートベルト締めていなくば顔面は潰れいたらむと若き医師告ぐ

救急の病棟は辛し運ばれし隣の少女は自殺未遂と

妹よ

乳癌の手術はいまや易しとも何故かくなるまで気付かざりしや
友多き故に故郷を捨てがたしといふは甘えよ来よ我がもとに
我はいま故郷遠き夫のもと手術は如何にとただ祈るのみ

戦争

放送は敗戦を告ぐと知れる午後の耳底に残る蝉しぐれまた

鹿児島市内にて

汗ばめる脚に纏わるスカートのなべての絆断ちたき日なり
雲抜きて白く輝く噴煙の動かぬに見入るひとりの晩夏

子の帰省

子には子の悩みありしと盆に集ふ子等の語れる酒ほの苦し
し
眼差

傷つくを恐れ眼差し受けざりし君が想ひを知りたればこそ
手を延ぶれば牽かれ崩れむ我なれば絶えて眼差し会はさざりけり
我が生の節々に会ひし眼差しを深々と背に受けつつ来たり

敬老の日

石鯛の刺し身一皿購へり定年の我が姑を祝ふ日
娘より姑と我に花届く敬老の日の仲間に入りたり

九月

ぎこちなく鉄扱ふ夫の背に舞ふ徒長枝は若草色にて

地雨止み曇天写す濁流の鈍き光の断つ豊作田

秋空を白燦めかす二羽の鷺見えざるまで夫と佇む

日向紀行

牧水の生家を訪ね山深き静寂の気に感傷止まず

牧水の軸にその歌口すさめば孤愁の思ひ胸を去来す

牧水の眺めし山は公園となりたる侘し語る木々なく

眼前の山は公園と化したれど尾鈴の峰は今日も霧立つ

泡白く嘔む列柱の岸壁の深き碧なり馬が背の淵

馬が背の淵を覗けば海の削るその天然の造形の奇よ

耳川に沿ひて下れば伝説の船出の港美々津に至る

夕暮れの霧島宮の大いなる赤き鳥居をすがしと仰げり

夜

虫の音もか細くなりて古びたる赤きひざ掛けまたとり出す

十一月

囲炉裏

遠来の友の饒舌囲炉裏辺に紅顔のおもかげ重なつつ聞く
薩摩汁の鉄鍋は炉にたぎりゐて一期一会の刻噛みしむる
俯きて火着放さず火を弄る寡黙の人は何想ひある
鮎の串椎茸の串酒滴てる青竹と炉は華やきてあり
炉に炙る鮎の串我に差し出す若き棟梁の笑顔は赤し

十二月

夜道

山里の道は灯もなし満天の星と語らぶ杳き田のいよ
風もなき夜道に唇は気付かざる瀬の音高し樹の影も高し
橋梁の遠きに車の赤き灯の無情無常に闇を縫ひ消ゆ
店の灯の光芒は川面に長くして我の歩みと共にたゆたふ

赤塚甚豆花氏の訃を聞きて

句の会の先達の訃聞けり在りし日の小さき悔いよ小さき痛みよ

庭先にて

山茶花の紅はや垣にこぼれぬて今日も二通の喪の知らせ受く
荒涼の庭隅に咲く一輪の冬薔薇の朱を我とこそ想へ

雑感

曇天を仰ぎ飛蚊をしばし追ふ追へども逃げぬ我が眼の蚊の群れ
我生きて二万二千余日てふ残りは知らずも今我はあり
噴煙も山をも隠せる曇天を恨みつつ友を案内するなり
これも凶器あれも凶器たるらむか事故に怯ゆる事故を見しあと
肉親の全て遠きを思ひつつ新物の鮭炙りあるなり
信楽の狸の笠の碎け居り台風一過の狼藉の中

二十首詠草

只管に冷えこむ庭に孟宗は身じろぎもせず耐へて立ちたり
孟宗の梢は空を掃く如く寒風に揺れて雲一つなし
年の瀬に孟宗林を間引きせば見透かするなり我も隣も
間引きせる竹林に入れば其処此処に切株しつかと枯葉を分かつ
竹林を間引きてみれば南天や椿の実生の小さき現る
早春の気まぐれ嵐に孟宗は痛ましきまでお辞儀し続ける
孟宗の梢の先の空の先信濃の諏訪に父臥せ給ふ
孟宗の軋める音は父君のいくさの傷の痛みとぞ聞け
銃弾の太腿貫き半世紀米寿の父は歩む能はず
梵学を囑望されにし父なれど戦は全てを狂はせ潰せり
仏道を学ぶ身なるに山砲の隊長となれる悲運の幕開け

砲弾に散れる中国の無辜の民父の慚愧の深さ計れず

平和祈り何千巻もの経文をただ只管に書き続けし父

スプーンを口に運ぶも半分はこぼすてふ父の衰へを聞く

母逝きて五年を経たり急坂を滑るが如き父の衰へ

姑と夫の故郷に夫を待ち遠き薩摩に我沈潜す

その視線常に我にあり我は問ふこれでよきやと母の遺影に

母よ母我は知りしよ在りし日もその思ひ常に我にありしを

ふと見れば筍一つ顔出せり我励ますや寒風の中を

轉りに誘われ見れば孟宗の梢春光に燦めきそよく

雨晴れて朝日射し込む竹林に春生れる如淡き靄湧く

提出用自薦歌

紅梅の花びらは雛の唇よ手水の面にゆるく回れり

ひよどりよな啄みそ紅椿赤爛漫であらまほしきに

芽吹き初むる草々の上に撩乱と桜貝散る八重椿散る

売出しのチラシに誘はれ購へるマーガレットの苗のか細き

夕日浴び大空高く行く鴉鳴き交わす声も遠く遙に

ばさばさと傘畳む音して鴉らは降るが如くに木々に止まれり

手すさびにトランプ並べぬ狂ほしく夫待ちし夜を遠く思ひつつ

我独り夫の故郷に夫待つ充足感もある春の夜

如何ほどのことやあらんと晶子読みて脱帽と思ふ心愉しも

雪化粧せる普賢岳寄り来たる早春の朝の機上の窓辺

綿雲の下はパステル色の海アメンボの如き船浮かぶ見ゆ

定規もて区切れる如き広き畑斜めに過ぎて着陸も間近か

初めての鉄道乗り継ぎ甥の式の宗像神社に間に合ふだろうか

雨上がり朝日射し込む竹林に春生れる如淡き靄湧く

霧中に竹林の影浮かびいて梢は朝日に活き活きとそよぐ



一九九六年

朝の街

冬の陽は並木に淡し襟立てて一人の朝を楽しみて行く
歩む頬に冷気はすがし足早に通勤の人の無表情なる
霜光る街並みにふとプリムラの色の溢るる鉢並びる見ゆ
店頭小さく赤き芽を持てる牡丹芍薬我を呼びたり
花々の苗抱へつつ店出でて幸せ気分をひととき味はふ

賀状

ただ賀状のみ取り交はして四十年君が面影とこしへに若し
宛て名写す去年の賀状に二度と来ぬ人のものあり筆暫し置く
去年の賀状最後となりし筆跡の達者な追記に思はず涙す
吟行の那須楽しかりしと追記ある賀状の主は今や黄泉路に
今一度余一蕎麦をと言はれしに帰りを急ぎて叶へずを悔ゆ

豆餅

豆餅を喰めば彷彿と今は亡きうからの集ひのさざめき聞こゆ
豆餅を喰み懐かしむゆるみなき信濃の朝の清冽な気を

入来峠

ハンドルを握る手固し初めての入来峠の螺旋を下る日
前に行く車は無けれど後より追はるる如く峠登れり
我が思考ふとさまよふをいくたびか戒め戒めハンドルを握る



亡き母想ふ

我がために仕立て直せる母よりの紬の羽織の紐のくれなる
我がために仕立て直せしか仕付けある袴の襦袢は私の対丈

雪

鈍く光る空を仰げば目眩めく雪はたと湧きて消えゆく
仰ぎ見る雪空の鈍き光より生れ消えゆく須臾の命よ
いづくより生れ消ゆるや振り仰ぐ雪空に舞ふ須臾の命よ
はたはたと降りつのである雪の空仰げば鈍き光にめくるめくなり
降りつのである雪空の鈍き光より目眩むごと湧く須臾の命よ

葬送

父の遺影抱く山辺の細道の葬送の列に粉雪の舞ふ
喪の草履踏む霜解けの道細く遺影抱く手に風は冷たし
残雪の斑の山の遠くありて葬送の列は寂として行く
うなじなぶる冷たき風よ音もなき葬送の列に現に我居て
葬送の列に現に我は居て斑雪衝く風の音を聞く

背信

母亡くて今また父なき寂寥はみな堪えしことと炬燵に突っ伏す
濡れ石の光春めく朝なり父逝きてはや十日経るなり
性善に忍耐強き父なりき子の背信を如何に見るらむ

投歌

チューリップの花びら風に揺れ崩る名残の婀娜を陽にしなだれて

山はまだ芽吹きも気配の木々の間をほの白く刷く山桜花

雨

降りしきる薩摩の山路を故郷の味噌を求めて町へと走る

ワイパーの速度を上げて雷鳴を後ろに聞きつつ山路を急ぐ

人気なき山路嬉しも思い切り飛沫を上げて走る梅雨の日

雷鳴は背後の山かワイパーの速度を上げてカーブ切るなり

水滴をざざと掃きぬるワイパーの速きリズムは私の鼓動か

雨音を聞きつつ心安らげり今日も閑居の憩ひの日ならむ

雨続きの庭を覆へる雑草に焦り覚えしは過ぎし日のこと

どくだみの花の白さの目に染むる霧雨の日は亡き人偲ばむ

クリッククリックとマウス転がし雨の日はしばしゲームに憂き世をク

リア

クリッククリックとマウス転がせばカラフルな画面開けて憂き世はク

リア

庭

窓に舞ふ揚羽蝶汝は山椒の若葉食いゐし翡翠の虫か
植え付けし山紅葉の花飛び立たず命の力は未だ満たざり
びっしりと葉裏に並びし毛虫らは厚き葉を食む共同作業と
許せ毛虫椿も大事とスプレーを掛くればはらはら糸ひきて落つ

投歌

快晴の足摺岬の崖下を食む波白く孤愁を揺する

岩剣城

喘ぎ喘ぎロープ伝いて急坂を遅れじと登る岩剣城
断崖を攀じ登る我に石や矢の降れる幻影岩剣城
甲冑の重きを着けて山城を攀じ登るてふ昔偲びき
雑兵のごと攀じ登りたる荒城に風立ち騒ぐ春浅くして
荒城の高みに立ちて見下ろせば霞に淡き桜島山
甲冑の骸転がりゐし谷ならむ血よりも赤き山椿咲く

雑感

寄せ消える車の音を買きて鶏鳴続けり今日は晴れなむ
門脇のうつろの幹の桜木に七つ八つのほの白き花
人のみな我に優しと思ふ日よ思ひ抱きて早や寝むとす
見えぬ手にそつと推されている如し幾多の危難逃れし不思議に

四月

幼き葉それぞれの色に競ひ出で陽に輝きて山温かし
春の山芽吹きのいろもそれぞれに山笑ふてふはかくやと悟れり
芽吹き初むる梢の影のしるくして無窮の朱のはるかに日は落つ
残照をはるかに佇み亡父亡母の気配をそつと一人たのしむ
石楠花もいつか色褪せほの白くありし日の母臉に去来す
彫銀のさざ波燦めく春の海想ひも刻もゆるゆるたゆたふ
それぞれの芽吹きの色に映えて山笑ふてふはかくやと頷く
門脇の椿大樹を見上ぐれば朱びつしりと我を威嚇す
楠若葉燃え輝ける新しき駅前広場に君待ちちみつ
新しき駅前広場の楠若葉燃え輝けり君待つ我も
傾ける陽にピルの影長くして橋桁低く飛ぶつばくらめ

同級会

同級会と信濃の友の大挙して薩摩に集へるこの日晴れたり
北薩の夏山深く縫ふバスは還暦の信濃の乙女にて満つ
山の藤車窓に触れむばかりにて遠来の友らの歓声誘ふ
学舎を出でて初めて会ふ友ら還暦のいまは名も浮かび来ず
それとなく胸の名札の旧姓を見やりて追へり若き日の影
霧島の大浴場の混浴をはしゃぎて覗く還暦の乙女ら
子を育て姑看取りて初めての飛行機の旅とふ友慎ましく
逝ける友病める友らの急カーブに増える年代に集へし幸せ

寝息いびき我のは知らずそれぞれに聞きては眠れる五人部屋な
れば

涙顔見合せ笑いまた涙特攻会館の重きひととき

戦争の是非は非ならむただ無垢の若き兵士のひたむき悲しも

教え子にと五色の糸の小手鞠の五十も作りて持ち来る先生

老いし師の南州神社の梅檀の花拾ひるる肩も細りて

さらば友二度とはあらし今日の旅今日の悦び今日の輝き



従弟

双生の兄は侍医たり弟はブラジルに病む死の床なりと
兄弟の見分けつかざる二人なりきその腕白に泣きし日もあり
ジョン・ウエインとジェラルド・フィリップの面影を宿せし君は遠
く病むはやく

弟の病むブラジルへ立つといふ従弟は卒寿の父母には秘すと

毛虫

びっしりと葉裏に並びし毛虫らは厚き葉を食む共同作業か
許せ毛虫椿も大事よとスプレーを掛くればはらはら糸ひきて落つ
舞ふ揚羽汝は山椒のやわき葉を食べ尽くしぬし翡翠の虫か

戦争と平和

自爆とは肉弾三勇士特攻隊いままたハマスのテロの無残さ
テロはただ憎しみのみを増すものを狂信のなせる殺戮果てなき
狂信を生む教育の怖さ思ふ我らの世代は証人となるべし
ガンジーの墓に額づきその深き愛の底ひに絶望も見き
インドとは仏の国ならずや暗殺に倒れしガンジー母子の墓園あり
宗教が束縛たれば排他たれば切り放つ剣持てよ人類
映像の世紀として無残な戦場の実像を知るとも争ひ止まず
サラエボの無残な街よ戦場を映画の場面と見紛ふな君
撃たれたる血腥き人の映像に胸塞ぐ思ひ麻痺するなかれ
直視する勇氣掻き立てシヨアを見し戦慄すべきナチの虐殺

人の心の奥の奥には棲むならむ民族蔑視の不可解なほむら
良き夫の良き父のなせる冷徹な虐殺にみる人間の怖さよ
戦争の根源は欲よ竹島の領有てふに心騒ぐ我
人刺しし柸二の心の奥の淵知るべくもなきは幸せなるべし
行き行きて神軍の人肉食せしとその後味は死まで離れじ
正しき者先ず屈せよと教へたる亡父の師の言葉噛みしむるなり
開戦の間近な夜に密めやかに出征ちし亡父の軌跡を偲ぶ日

姑の羽織失せしとの言に腹立てている平和の世の我

にしき江 清流歌集用自選

病む猫の背は細くして蹠跟と竹の枯れ葉の吹き溜まりを行く
らつきょうの最後のはしを切り落とし眼鏡外せり梅雨寒の午後
汗ばめる脚に纏わるスカートのかなべての絆断ちたき日なり
雲抜きて白く輝く噴煙の動かぬに見入るひとりの晩夏
放送は敗戦を告ぐと知れる午後の耳底に残る蝉時雨また
ぎこちなく鉄扱ふ夫の背に若草色の徒長枝の舞ふ
秋空を白燦めかせ行く二羽の鷺消ゆるまで夫と佇む
遠来の友の饒舌囲炉裏辺に紅顔のおもかげ重ねつつ聞く
薩摩汁の鉄鍋は炉にたぎりゐて一期一会の刻噛みしむる
俯きて火箸放さず火を弄る寡黙の人は何想ひるむ

風もなき夜道に昼は気付かざる瀬の音高し樹の影も高し
山茶花の紅はや垣にこぼれゐて今日も二通の喪の知らせ受く
冬の陽は並木に淡し襟立てて一人の朝を楽しみて行く
父の遺影抱く山辺の細道の葬送の列に粉雪の舞ふ
うなじなぶる風の冷たさよ音もなき葬送の列に現にわれ居て
母亡くて今また父なき寂寥はみな堪へしことと炬燵に突っ伏す
山はまだ芽吹きも気配の木々の間をほの白く刷く山桜花
甲冑の骸転がりゐし谷ならむ血よりも明かき山椿咲く
幼き葉それぞれの色に競ひ出で陽に輝きて山温かし
芽吹き初むる梢の影のしるくしてはるか無窮の朱に日は落つ
水滴をざざと掃きゐるワイパーの速きリズムは私の鼓動か
どくだみの花の白さの浮かびゐる霧雨の日は亡き人偲ばむ
快晴の足摺岬の崖下を食む波白く孤愁を揺する

夏

百尺の竿頭より歩を進めむと夫の故郷に二年目の夏
サルビアの紅も萎へる暑き日は夫の隻語も刺ある如し
いさかいとその修復のシーソーの夫ありてこそその重畳の日々
黙々とホース両手に水やりの夫は熱ある残照を浴びて
鹿子百合に黒き揚羽の巡りゐて臙脂の花粉を紋と着けたり
熱気ある残照を浴びて黙々と不精髭面の夫は水遣る

食ぶるため生きゐる如し西日背に二合の米を今日も量りて
膝上で夏の抜け毛を梳きやれば軽く手を噛む母と成れぬ猫

旅

礫の台上より空仰ぐこと旅に焦がるる夫の郷里にゐて
いつの日にか願ひ叶ひてよ遙かなるナスカ・クスコを天翔ける旅
旅に恋し旅に焦がるる我なりき見知らぬ国に独り立ちたし

八月

台風

群青の空を流るるちぎれ雲明日は台風の来たらむとかや
雨戸締め停電となれる暗黒に木々の悲鳴が窓揺するなり
四国より夜を徹して来たる婿ら嵐も知らずただ眠りゐる
柿の実も葉もちぎれたる撩乱よ嵐過ぎにし虚しさのまた
根元より折れたるピンクの百日紅いつ喰まれしや白蟻のあと

音楽の泉

のびやかに甘き調べの流れゑて快晴の夏の朝のドライブ
若き日のヴェートーヴェンの旋律の甘きに酔ひて助手席にあり
モツアルトの亜流と人は言はば言へヴェートーヴェンの若きロマン
を

五十年変はらぬイントロ「音楽の泉」にしばし若き日夢む

夕立

雷鳴のいよよ近づき一斉に雨音立ちぬ子の刻てふに

盛夏過ぎたりといへども日中の灼熱に夜半の夕立訪ふ
大杉のかなたに閃光瞬きて雷鳴までに二呼吸あり

高千穂

火口より渦巻く風の霧払ひ姿かいま見ゆ高千穂の峰
山巔の鳥居も天の逆鉾も淡き影なる霧の高千穂
台風之余波か山頂風強く濡れし帽子も肩にはためく
霧雨に濡れしガレ場の岩滑り崖の如きを這ふて下れり
雨に濡れしガレ場の崖を這ひ下る我を若人ささと抜き行く
登山用の装備万端整へてまた相まみえむ高千穂の峰

昭和寺葬

一軒の檀家も持たぬ昭和寺は世界平和を祈願する寺
亡父建てしこの昭和寺の葬儀なり生前の亡父の願ひなりしよ
高齢も高位も思はず友情に比叡の山より高僧来たれり
遺志嗣ぐは孫なり吾子なり凜として僧衣を纏へる姿頼もし
蜻蛉二匹来たりて止まる高僧の頭上に優し山の秋の陽

星

かたかたと金盞鳴らし銭湯の夜道に数へし流れ星はや
北斗の柄延ばして探せし北極星薩摩の峽にあり処を知らず
雷鳴の遠くに聞こゆ薄墨の雲流れるて白き星あり

満天を見上げて銀河鉄道をアニメの如く宙に描けり
ワープロを打つ窓の辺の梅ヶ枝をすかして見上ぐ宵の明星
あの星は何万年も前のもの何万年後に我を見る星

秋蝉

秋蝉をいつしか聞かざり木戸脇の日々草の花もまばらに

十月

心の傷

長女なればと庇護に努めし弟妹の心の内のそねみ知らざり
背信の思ひ悲しも弟妹の妬心の深さを知らされし日よ
骨肉の争い望まず父亡きを我ひたすらに口を閉ざせり
口を閉ざす我は心も閉じたるか歌にも吐けぬ悲しき心よ
骨肉の争ひ避けむと弟妹のなせるがままにただ口噤む
父の遺志を反故となせるや弟妹の己が利のみを図る哀しき
ちちははの遺影に語るのみとなる我の心の傷の深さを

天草

天草の海の燦めき蒼き島山は語らず流れし血潮を
天草の名に惨劇の痛みあれどまばゆき緑の島は静けき
ゆるゆるとフェリーは巡る殉教の島々は秋の陽に映えてあり

岡城

遙かなる久住の山に一筋の煙立つ見ゆ秋の岡城
堅牢な石垣高し岡城の広きくるわに往時偲ばゆ
絶壁の岡城を囲む谷深く戦の時代の厳しさ悲しも
石垣の整然たるに武士のごと背筋伸ばして歩む心地す
流れくる荒城の月に楽聖の想ひを思ふ感傷の刻

久住山

車窓よりすすきの原を見上ぐれば秋色に染むる久住連山
夕映えの久住連山色づきて無窮の空にがっしりと座す
広大なすすきの原をひざに掛け錦纏へる久住は座したり

十一月

肥後ドライブ

高森の眺望見せむと小春日をひたすら車走らする友
晩秋の高天に立つ根子岳の間近にありて気宇は果てなし
高原のすすきが原にコトコトと消えし車両は玩具のごとし
秋晴れの通潤橋の放水に淡き虹立つ川面に散りつつ
川底の石切り積めるてふ水道橋肥後の石工の技の確かさ

過ぎし日の夫婦喧嘩よ娘の描く思ひ出の記に苦笑禁ぜず

父母逝きて戦争戦後の幕引かむ息の未来に夢を託して

年末雑感

父逝きて重き心の重き日々この十月は我に十年を刻む

君もまた母亡くせしとや喪の報にとほき日の君ふと思ひ出づ

胸底に押し潰し来しいくつかの想ひの屍を曝す日もありや

デラシネ（根無草）もいつか根付かむ支へてよと夫の腕をそつとま

さぐる

夜道

我が胸に気味よき痛み残しつつ冬ざれの風吹き抜けるなり

流れ行くテールランプの赤き数珠波瀾の今年も変わらず暮れ行く

近況雑感

ブラックの薄きコーヒー独り飲む未明の朝のワープロの前

憑かれたる如くに起きて独り座せば想ひたゆたふ夜明け未だし

時刻む音のみのしじまに独り居れば想ひはいつか亡父亡母のこと

語り合ふこと永久になき寂寥よ親先逝くは世の常なれども

父母の別れの辛さは時を経てなほひたひたと染み入る如し

只管に尽くすことのみに生きし母一語の苦痛も洩らさず逝きし

故郷の故郷たりしは父母の健やかにおはしたればとぞ知る

今はただ遠くにありて想ふべしと望郷の念独り噛みしむ
重たげな車通りて遠き日の列車の響きに重なり思ほゆ
轉りの窓辺に飛び交ひ思ひ出をさすらふ我に夜の白む告ぐ
父母の加護の厚きを思ふ朝庭の濡れ石に光春めく
散り敷ける椿の花のいよ増して薩摩に四度目の春を迎へり
心より語らふ友も遠ければ我が矢は全て夫を的とす
四六時を共に過ごせば夫と我こらへの糸も細りたるべし
いさかひの爪も時には鋭くて互ひの心に印す弧の傷
諍ひの鋭き爪の掻き傷の膿まざるは愛の消えぬ証か
我が歳を我が老いを思ふ為さざりし為せざりしこと余り多きに
これからの我こそ我とて明日をのみ見つめて今も歩む六十路を
連れ合ひと連れ合ふて行く弥次喜多の老後の道を楽しまむいざ
春の風竹の梢をそよがせて人皆我に優しと思ふ日

昨日とも変はらじと思ひて幾年か新しき鏡にふと老いを見る
鏡台の見慣れし面にふと気付くいつしか我もかく老いたるか
父母の亡くて露呈せる弟妹のエゴに戸惑ひ黙したる我
むざむざと亡父の願いを無視するは長女我には許せざりしよ
昭和寺を素手にて建てし父なりき平和の願いの結晶の寺
先に逝きし妹や母の献身の証でもある赤き寺なり

世白々と塗られし橋よ昔日は鉄重々しく開閉せしなり

世のために尽くせと母を大学に入れたる祖母を知るは我のみ

額の中の父母の眼差し我にあり我常に問うこれでよきやと

父母の加護かと思う何時しかに希う道筋通じ行くなり

当然と受けゐる如き我なれど我が深き謝意知り給へ君

言葉には出さねど夫のいたはりを思ふときあり涙するあり

